

## IV 移植試験

### 1 予備試験

目的：亜熱帯性海産頭花植物について移植の先例がない事から、当初は移植場所による生育状況をみるため、昭和49年5月29日、主試験地屋嘉田において下記の方法で移植試験を行なった（参照図版Ⅲ）。

方法：リュウキュウスガモとベニアマモの混生群をスコップで底土ごと採り、木箱（縦30cm、横50cm、深さ20cm）にそのまま移し、それを岸寄りの干潟から沖側の礁原に至る直線上に約50m間隔に合計20箱配置した。潮間帯においては穴を掘り、底表面と箱の上端が同じ高さになるように埋めた。

経過：干潟中の3箱は8日後には枯れた。干潮時水深10cm内外のタイドプール中のものは、葉体の数が多少減った程度でいずれも大差なく生育しているが、大潮干潮線下のものについては大部分に食痕が見られ、月日の経過とともに箱中の土砂と株数が減少してきている。結局移植後251日現在に至る間に、枯れたもの、及び土砂とともに流失したもの(A)、生育中のもの(B)の箱数は、干潟域でA、3箱、B、0箱；タイドプールA、0箱、B、3箱；大潮干潮線下A、6箱、B、5箱となっている。

### 2 干潟への移植

目的と方法：干潟を掘削して常時滞水させた場合の移植草の根茎の生長（水平方向への広がり）を観察するため、昭和49年7月11日、屋嘉田潟原にて行なった。面積 $1.8 \times 1.8 m^2$ 、深さ50cmの人工池を7面つくり、板わくをはめ固定した。移植方法はリュウキュウスガモとベニアマモの混生群をスコップで底土ごと採り、池中の4ヶ所にそのまま植え込んだ。

経過：移植後の水平方向への広がりについては、208日後現在に至る間、小さくなったものはあったが、広がる様子は全く見られなかった。

なお同干潟にはサバニの接岸用水路として長さ約300m、幅10m内外の掘削水路があり、常時滞水し、潮の干満による流れがある。そこで7月25日、同水路の7～8m間隔毎に人工池で行なった植え込みと同じ方法で移植し、その後の経過をみた。

同水路の流動は、ピーク時にはかなり速いにもかかわらず、移植草はよく“根づいた”。またその後の生育状況は人工池のものと同様であったが、188日後現在では同水路のはぼ中央部に当る1サンプル中に水平方向15cm程度の伸長が認められた。今後生長期にかけて、人工池と並行してさらに観察を続けていきたい。

### 3 礁湖への移植

目的と方法：アジモの生育が全く見られない場所として広い水域を有する礁湖がある。一般に礁湖はアジモ帯に比べて水深があり、海水の流動が大きく、したがって漂砂があり、また底質中の栄養塩が少なく、さらに食害が大きい等の環境要因が上げられる。このような場所で本草の生育状況をみるため、昭和49年7月29日、屋嘉田の湾中央部において移植試験を行なった。使用草はリュウキュウスガモ、ベニアマモ、リュウキュウアマモ、ボウバアマモの4種類で、根茎部をワイヤーメッシュ（ $1.5 \times 1.8 m$ 、太さ3mm、×7枚）に紐でしばり、砂で覆った。